

## 巻 頭 言

## 国際化の時代

齋藤利和 日本精神神経学会理事

Toshikazu Saito

7~8年前、米国在住のN教授から「もう日本人のポストドクは採らないことにした」というお話をお聞きした。「日本人はね、きついことを言うとなぐいなくなってしまうんだ」というのが理由らしかった。私が米国に留学していた25年前、貧しい生活環境に耐え、多くの日本人留学生が活躍していたものだ。無論、「昔は良かった」などと回顧趣味に浸ることがこの小文の意図ではないが、留学事情が様変わりしていることは確かなようである。2002年から、日本人の海外留学生の数は急速に減少している。一方、日本の留学生に取って替わっているアジアの他の国の留学生にも変化がみられる。私の留学した頃は米国での永住を目指していた留学生の多くが帰国して母国で活躍している。例えば中国では高給と高い地位を保証して優秀な研究者の帰国を促している。そのせいか、医学系の国際学術誌への韓国、中国からの投稿が増え、強力な我々の競争者となっている。

このこと自身は喜ぶべきことではあろう。つまり、欧米のように地域内での学術交流が盛んになれば、科学界におけるアジアの実力と地位は飛躍が期待されるからである。地域のブロック化なしに国際化はあり得ないのは何も経済に限った話ではない。しかし、残念ながら、アジア地域内での学術交流は欧米に比べ盛んとは言えない。むしろ、日本をはじめとしたアジアの各国はアジアの中での交流よりも米国との2国間交流をはるかに重要視しているように思えてならない。さて、国際学会でのアジアの研究者の招待講演者の数は依然、欧米のそれに比べれば少ない。この原因は総体としての科学水準の差も否めないが、地域における学術交流の密度の差も影響しており、ヨーロッパなどは地域が1つの単位として国際学会と向き合っていることも大きい。換言すれ

ば、我々が既に始まって久しい、国際化に対応していくためにはアジアにおける活発な学術交流をその軸とする必要がある。ところで、最近、その機運は盛り上がっているように思う。ここ数年、アジア諸国との文化交流が盛んになっている。日本のアニメ、漫画、ポップスはアジア諸国で広く受け入れられている。一方、我が国では韓国ドラマのブームはそれにとどまらず、韓国語、韓国食のブームをも巻き起こしている。国際交流にとって重要なことは、互いを知り、信頼の基礎を作ることである。その意味でこうした交流は医学・医療分野の国際交流に良い効果をもたらしているように思う。

歩みはもう始まっている。最近、いくつかの国際学会ではアジアの地域学会が立ち上がっている。昨年あたりからヨーロッパ、アメリカ、アジアの各地域学会が相互に学術総会に他の地域学会の会員を招待しあい、連携して合同シンポジウムを企画するなどの試みが見受けられる。また、各国学会間の交流も盛んになりつつある。こうした動きは、まさに前述した、国際化と地域のブロック化がもたらした新しい流れである。日本の国際学会に対する発言力の向上と貢献が求められている。

さて、当学会の国際交流と国際化についてである。当学会の国際委員会に出ると、所謂「生きの良い」若手の委員が多くホッとする。アジアの若手精神科医を総会に招いて、交流のセッションを持つことが続けられている。WPAを始め多くの国際学会に代表を送り出している。こと国際化に関しては我が学会は日本の精神医学・医療を代表する学会として相応しい役割を果たしていると言えるのではないか。今後、このような活動がますます活発になることを願っている。